

喧嘩や道樂 生命の安賣をする其人の生命は只のやうなものである。所が此方は、もし戦場で死ななければ其人が平素の生活によつて實現すべかりし價值は澤山である。

先程述べたやうに意志の選擇力を働かせて價值が増加するのと同じく、五等が色々な種類の社會的自我即ちソシアル セルブスの中から、意志の選擇力を働かして最善のものを擇び、最高の價值ある社會的自我に集中し、他の社會我をそれに從屬させて働かすことは、其從屬させられた諸の社會我の價值が失はれるのでなくして、それが幾分にも選ばれた社會的自我の價值の中に包含されることになると思はれるのである。さういつたやうに、意志の選擇力を働かす場合でも、また違つた價值的結果を生ずる場合がある。それに就いて、もう一つ例を擧げるが、茲に家族我と云ふものに重きを置いて、それを最高價値とする人があると假定する。さうして國家我や人類我と云ふものを皆家族我に隸屬させてゐる人があるとする。他方には人類我を一番最上において、其次に國家我や家族我と云ふものを隸屬させて價值の體統を作つてゐる人があると假定する。此二人は價值の體系を持つてゐると云ふ點に於ては同じであらうが、家族我を最上の價值と見るのと、人類我を最上の價值と見るのとは、價值の範圍が違ふ。家族我は狭いもので、將來一家は潰れるかも知れぬけれども、家族我に比して國家我は比較的悠久であり、國家我に較べて人類我と云ふものは遙かに永遠性を持つてゐる。永遠なる普遍的の價值を最上の價值として生活する人は、それだけ偉大な價值を作り出すのではないかと思はれるのである。

六 宇宙的自我の建設と宗教の領域

かやうにして、人間は只々に自分の價值的殿堂を高く築き上げて人類我に達し、後には全衆生を抱擁した衆生我と云ふものに及ぼし、それからそれをもつと擴大して全宇宙を抱擁した宇宙我と云ふものに擴げて行く。かやうに段々自分の社會我を押し擴げると云ふことは、同時に、自我と云ふものゝ内容を豊富にし、その向上發展を示すものではないか。なせなれば、吾々は自我の生長發展を個人として望んでゐるが、即ち自分をユニクな空前絶後のものと思へば思ふほど、もつと自我を發展させたいと云ふ希望を起すのであるが、此自我を發展すると云ふことは、昔、中世紀の坊さん達がやつてゐたやうに、草庵に引籠つて參禪三昧の努力によつてやるのではない。さう云つた場合には單に頭ばかりの修養をするのであるが、單に頭ばかりでなく、實在の世界に實際の影響を與へて自我の生長を計るものでなければならぬ。自己獨特の力によつて實在の

世界に實際の影響を與へる。即ち我々の環境を改造して、自然環境や社會環境を改造して、益々自分を宇内に擴げて行かうとする。

それには勿論智的に自分を擴げること必要である。自分なるものと全宇宙との時間的空間的關係を知つて行くことは自我の價値を増す所以である。ヘエゲルがいつたやうに、知ると云ふことは既にその物に超越することである。吾々が宇宙と自分の關係を知ることが、其上に超越して自分を大きくすることになるのである。それは單にヘエゲル見たやうな頭の發達した人がさう考へたばかりでなく、原始時代から物を知ることが物に超越する第一歩として知られてゐた。物を知ることによつて、それをマネエテする支配すると云ふ意味に感ぜられたことは、原始宗教に於て見るも能く分ることであつて、原始時代の蠻人は自分に幸し又は禍してゐる神の名を知りたいと云ふことを求めた。例へば

「私に崇つた神様、貴下は地藏様でございますか、観音様でございますか、毘沙門様でございますか」と尋ねる。そして自分に禍してゐる佛様の名が分つて、それが地藏様と云ふことになれば、地藏様を取扱ふ方法で以て苦患を逃れようとする。かやうに、名を知ることがはそれに對して知識を得ること、知識を得ることは結局それに超越することである。

だが知識的にばかり超越しても、實際行爲に於て超越しない場合には、即ち實際生活に於て超越しない場合には、本當に自我を實現することは出来ない。古への哲學者や名僧知識など云ふ人達が參禪三昧の生活をしたり隱遁生活をしてゐて、眞理を達觀したと云ひながら、さう云ふ人達を娑婆に押出して實生活を營ますと、何の働きも出来ない。食ふことさへ出来ぬ。夫等の人は實在の世界を掴んでゐないからだ。實在の世界に影響するほど偉大なる自我を實現して

ゐないからである。故に、さう云ふ知識の方面からばかりでなく、情意の方面から實在の世界に自分の個性を擴げて、全宇宙を抱擁した生活をする。宗教的に云ふと愛の奉仕の生活によつて、自分と云ふものを無限に展開して他の者と融合し、他のものゝ生活興味、存在興味を自分の存在興味、生活興味の中に抱擁することが、宗教的に所謂愛の生活と云ふことになる。かやうな方法によつて、自分の環境にあるものを皆我が愛の内に抱擁する。意識的の實在に對しては、無意識的實在に對てよりも一層共通點が見出される譯であるから、愛の融合によつて環境にある凡ての他我(セルブス)を自我の生活圏内に抱擁する。云ひ換へれば彼等の利害關係は即ち自分の利害關係だとして生活する。かやうにして、段々宇宙的に自分を擴げて、それを實際生活に實現して往く。それによつてのみ、個人と云ふものが無限の價値を發揮しうるのではないかと私は考へ

る。

結局、此ばらばらの生活であつたものが段々に統一されて來、統一されると同時に個性化されて、普遍化と個性化の両面に向つて進み行く。内面的に個性化されると同時に、それが段々外面的に擴がつて往つて、自我を中心として全宇宙を抱擁することになる。かうした個人が無數にあつて、そのインタアリレエションが益々複雑になつて、個我と個我との生活内容は無限に折重つて往くことになる。さうして個々の自我は自分を中心として全宇宙を抱擁する。それが生理的にも、心理的にも、道德的にも、社會的にも、宇宙的にも、宗教的にも段々擴がつて、無限に人生の深みを作つて行く。そこに價値の増加があるのではないか。さういつたやうにペヤグソンの創造的進化を考へたならば、もつとそれが適切に意味あるものとなりはしないか。また一層哲學的になりはしないかと思ふのである。

最後にもう一つ附加へておきたいことは、もし吾等の生命の努力が或る絶對の目的に向つて行はれる、即ち最初から極つた究極の目的を實現して行くものだとするならば、ペヤグソンが明にいつてゐるやうに、宇宙に進化と云ふことはあり得ないことになる。常に生活の目的として絶對の規範があるとすれば、それは既定の目的を實現するだけであつて、人間の生活は之を實現する道具に使はれてゐるに過ぎない。目的は主であり、手段は従である。宇宙に既定不變の大目的があると假定したならば、創造的進化は不可能だ。もし宇宙の大目的が既にあつても、吾々がその目的を實現して行く過程に於て、自由に之を打破つて、新しい大目的を立てることが出来ること云ふ可能性があれば、その目的は絶對の目的でなくなる。その場合には、創造的進化は成立つ。けれども、さう

でなく、宇宙の目的又は規範が絶対のものであつて、宇宙の過程は必ずそれを實現しなければならんと云ふことになれば、創造的進化はあり得ない。

けれども、もう一つ創造的進化のポツシビリティーがある。そこに絶対の目的があつてもその目的は單なる目標として只一個の觀念であつて、それが實現されるとされないとは、我々人間の努力如何に條件されてゐるとすれば、(ヘエゲルの見方は、是に近付いてゐるが)、此絶対目的は實現されぬかも知れないほど、不確定のものなるが故に、さう云ふ場合には、宇宙に大目的があつても創造的進化は成立つと思はれる。けれども、其場合には、其目的は結局絶対性を失ふことがある。それは人間の努力がなければ實現されぬものであるからだ。故に人間は自由に其目的を除外して創造的に進化することが出来ようが、之に反して、宇宙に必至の大目的があつて、それが結局實現されることになるのである。

れば、人間の努力は無益であるのみか、幾ら我々が自我を展開して、價值の世界を築き上げようとも、それは始めから極り切つたことをやつてゐるに過ぎないのであつて、ニイチエの所謂「永遠の反復」をやるに過ぎないことになるのである。

故に、苟も創造的進化といふことを信するならば、絶対目的とか絶対規範とかいふものは絶対に否定しなければならぬ。宇宙は何等の目的もなくして始まつたものでありうる。そして少なくとも人間が意識的の生活をするやうになつて、目的は起つたのかも知れない。しかし、それは人間の作つた目的であつて、宇宙全體の始から極つてゐる目的ではなく、人間が作つた、だから人間的に改作されうる目的である。丁度それは私共が水上の月影を追つて走る如く、その人間の作つた理想目的が實現されようとする、また新なる理想目的が起る。理

想や規範其物にも永遠の進化がある。宇宙が無限である限り、また人間が無限に擴がる可能性を持つてゐる限り、吾々の實際行爲の世界、道德の世界が擴がつて往くと同時に、觀念的な理想や規範の世界も同時に、無限に擴がつて往く。私がかういふやうに考へる。

かやうに考へることによつて、今日の行詰つてゐる哲學を救ふことが出来るのではないか。ドイツ哲學には私共の考ではなんだか行詰りがあるやうに考へられる。その行詰りになる理由は、結局絶對理想とか、普遍妥當の意識とか規範とかいふやうなものを立てなければ彼等が満足し得ないからで、さういふアプリアオリをすつかり取除けてしまつて、物質からでも何でも構はぬ、宇宙の創造的進化のプロセスによつて價值の世界が生産されつゝあると考へては、どうであらう。その價值は人間の努力によつて生産されるもので、價值の増加

は、經濟活動 就いていへば材料として使はれた資本よりも、より以上の價值あるものが生産された場合でなければ、そこに價值の創造又は増加があつたとはいへない。それは量的又は物的價值のことであるが、それと同時に、哲學に於て質的又は靈的の價值を生産する場合にも、材料に使つた價值以上の價值を生産しなければ、創造的進化即ち價值の増加とはいへない。例へば私共が精神價值として日々多くの人々から同情とか、親切とか、愛とか、奉仕とかいふものを受けて、日々之を消費してゐる。そして私共は自分で消費する以上に愛や、同情や、親切や、奉仕を作り出して往くでなければ、そこに人間價值の増加はありえない、進化はありえない。吾々の消費しただけしか生産しないならば、宇宙は元の通りで、人間の價值は増進しない。吾々は自分で消費する以上に、物的價值であると靈的價值であることに拘らず、生産しなければ、人生の價值は増

加しない。かういふ條件の下に努力し、労働し、労働によつて新しい靈的價値と物的價値とを同時に作つて往く、そこに創造的進化があるのではないかと思ふ。(丁酉倫理會講演の速記)

跋 人生に於ける死の職分

故シカゴ大學宗教哲學教授

デヨオデ ビ フオスタア述

「最後に打勝たるべき敵は死なり(コリント前書十五章二十六節)」

一 死の問題

近代人の心裡には最早妖魔に對する恐怖はなくなつた。それは科學及び宗教の力によつてである。妖魔の恐れがなくなつたのと同時に、嘗て恐ろしかつた暗も怖はくはなくなつた。そして色々な災難も、或は暗の征服によつて、或は科學的技術の發達によつて、段々豫防が出来るやうになつた。色々な病魔も、

一つく、それは遅々たるものであるけれど、醫術の進歩と共に其姿を匿しつつある。然し、死は尙殘存してゐる。死は吾等の友ではないと人は云ふ。而してパウロは死を敵と呼び、人生最後の強敵だと云つてゐる。勿論、世には死に憧れる人がある。然し、それは彼等が死ぬる前から既に死んでゐるからである。即ち、死がより善き運命であるかの如く見えるほど、『生』なる言葉の中に總括された價值が彼等に採りて最早無意義となつてゐるからである。

されど死は遂に滅さるべきものなること、これ古い宗教的信仰であり、且つ新らしい科學的確信であると云へよう。科學的確信といへば、かのペヤグソンは、人類が全體として前後左右に數限りなき軍旅の一團を形作り、砂塵を蹴立て、進軍しつつ、如何なる抵抗、如何なる障害物をも跳ね飛して往くことを想像してゐる。而して死さへも遂に蹴飛して進み往くだらうと想像してゐる。か

くて吾等人間は死なぬことによつて死に打勝たんとするのである。が、又メチニコフの如きは、人間は必ず一度は死なねばならぬことに運命付けられてゐるけれども、病魔を滅し、正しき生活の方法を見出すことによつて、人間の生期を現在のその二三倍にも引き延ばし、吾等は死滅を積極的に悦びとはしないまでも、満足して死を迎へるに至るであらうなごゝいつてゐる。されど猛獸の如く吾等に飛びかゝり、肉も骨も微塵に掻き裂かねば止まぬといふ死、又は荏苒吾等の抵抗力を失はしめるまで、隱密に狡猾に、其恐ろしい仕事を果たす死、又は人生の花が咲き出でぬ間に、蕾の内に之を摘み取り、實が成る前に花を枯らし、熟する前に果實を揉ぎ取るやうな死——斯る死こそは誠に人間の良友とも見えないではないか。然し、充分長生を保ち、生に飽き果て、死ぬのであつたならば、然り、臘燭が燃え盡きて消えるかのやうに生命が燃え盡きる

ものであつたならば。生の願望が充分遂げられた後で死ぬるのであつたならば、即ち自分で希ふまでは死なないものであつたならば、人は能く死を理解し得るであらう。何となれば其人は自分の永い年月の仕事の成就した後にしか、此地上の生存を終へないからである。

されど、死は夫れ自身人間の良友ではないが、死あるがために死の禍悪を償つて餘りある程な徳義や価値を可能ならしむるのではあるまいか。かく思つて其處に死の苦みに對する慰安を得るのではあるまいか。見よ、死がなかつたならば、人生に宗教や哲學があつたであらうか。もし死がなかつたならば、生命の嚴肅なること、緊急なことが吾々に感せられ得るであらうか。もし死がなかつたならば、時勢を改善し、善行を以て世界を充たすやうに、最高の価値を人生に與へよと如實に警告することが出来るであらうか。

二 死は人生の大事實なり

事實、吾等人間社會では死をば純眞なる邪惡だと見る人が少くはない。彼等は曰く、一切の慰撫も説明も畢竟無益である。吾等は死滅なる苦がい事實にぶつ付かつては、久遠の不満足で満足して居らねばならない。ストイック的な諦觀——賢い放任、然り、これより外に短い人生に於ては、處世の苦痛と運命の苛酷とに對する吾等の採るべき態度はないのである。而して又彼等は自から慰めていふ。死のことを思ふな。死のことで苦勞するほど馬鹿なことはない。もしそれが苦になつたら、一刻も早く其事を忘れるまでのことである。

勿論此言葉にも一面の眞理はある。努力し、奮闘し、創造する賢明なる強者は死を思ひ煩ふことはない。彼は逡巡せず、躊躇せず現在の仕事や將來の任務

に只管注意を留めて、聽て來る人間共通の運命なる死に就て少しも念ひ悩むことはないのであらう。然し、これは諦觀でもなければ放任でもない。それは死に對して駝鳥のやうな自己欺瞞の態度を採るのでもない。死は忘却によつて棄て去らるべきものではない。死に打勝たんがためには、紛らかしや打忘れでは駄目である。それは却て之を記憶することによつて打勝ち得べきものである。吾等が祖先の人々は死に就て多く考へた。死の問題に就て聖書や聖典を屢々讀んだ。そして死の事を説教し、死の事を歌つた。それは餘りに極端であつたかも知れない。然し、死が人生の終局であると思える場合にも、常に彼等が希望の鳳凰^{フェニックス}は絶望の死灰から蘇らないことはなかつたのである。現代人は慥に他の極端に走つてゐるであらう。走つてゐるが故に吾等は古人の如く死の征服者ではなく、却て其奴隸である。吾々は此點に於て自由ではない、そして吾等の宗教生

活は不満足である。それは吾々が死の思ひを回避することによつて死に打勝たんと試むるからである。

されば此近代人の混亂、痛苦、恐怖、怯懦の眞只中に於て、私は諸君と共に死の問題に就て暫時思を潜めて考へて見たいのである。蓋し、死を理解してゐない者は生をも了解することは出来ないからである。兎に角に、死は誕生の事實が重大事であると同様、人生に採りて最大重要事である。少くとも最大重要事の一つである。それは無限の範圍を有する事實であり、何れの瞬間にも吾等を圍繞せる實在であつて、心臓の鼓動々に響き渡る事實である。然しそれは恰も空氣や、光線や、時間の流れや、心臓の動悸などが吾等の外的又は内的生活の單純なる而も根本的なる大事實であると同様、死は宇宙の大事實である。吾々が是等の事實を意識してゐないのは却てそれが餘りに重大な、常住な、明瞭

な事實なるが故である。それは兎に角に、吾々の多様多面な情熱の生活は、死の暗愴たる水面に浮んでゐるのであるが、早晚再び其深淵に沈まねばならぬといふ恐ろしい神祕的な或物に面してゐることは否まれない。されば、生の神祕を悟得せんとするものは折々吾が宗教的修養を死の問題に捧げねばならぬといひたいほど、それは人生の大事實である。

三 死は眞生命の門戸か

死は其暗い影を吾等凡ての人々の上に投げかけて、吾々の幸福を晦まし又は之を危くする。此處に幸福とは生きんとする意志を意味するに外ならぬ。されば死は幸福の強敵ではなからうか。此生きんとする意味は如何なる人々にも深く根ざせる要求であつて、只生さんがために生くることだけでも、屢々幸福だ

と見做されてゐるほどである。即ち如何に貧弱な生活であつても、死なる大不幸に較ぶれば寧ろ望ましきものと思はれてゐるのである。然し、此最後の敵なる死に打勝たない間、吾等は決して幸福であることは出来ないのである。吾等が幸福の問題は、如何にして吾等は死に打勝ち能ふか、如何にして吾等の暴君なる死を吾等の奴隸となし、吾等の敵なる死を味方となすことが出来るかといふ問題である。創世紀の傳説に據れば、最初から人間は地上に主たるべく創られたものであつて、死は地上の事物の一として之を征服すべきものであるといふ。而もそれは如何にして征服され得るのであるか。

嘗て、死は罪の應報として來る處罰なりと見做された時代があつた。アダムなる一人の男が罪を犯した、そして死は罪によりて此世界に入り來つた。かやうな見解は慥に死の怖れを無限に深からしめるものに違ひない。生命は生命其

者の懲罰なりと吾々は信じ得るかも知れない。が然し死を以て生命の懲罰なりとは決して理性に根據を置いた説ではあり得ない。それは直接啓示又は絶對的天啓によるものとしてのみ受取らるべき謬説である。

死は又地上の偏頗な部分的な幸福から久遠の祝福の充全なる且な純真なる悦樂に進み入る大扉であると見做されたこともあつた。而してそれが眞實に積極的に確信されてゐた時代があつたのである。此種の信仰を懐ける人達は今尙世に少くはない。彼等はいふ『私はもう此世を去つてクリストと一所になりた。私に採りて生は即ちクリストを意味し、死は却て勝利である』と。是等善男善女の素朴な信仰の幸福を多くの人々は羨むであらう。然し、それは當面の問題ではない。只吾々をして思を潜めしめるものは此信仰の事實ではなく、此事實の云ひ現はされた形式に就てである。要するに墓なく死なき幸福を常に墓

場の彼方に期待する生活は所詮自殺的である。それは墓場の此方にある重要事を逸却し、現在此世に於ける生命の價値、生活の幸福を没却して了ふ。誰れも眼にし耳にしたことのない幸福を求むるが如きは、結局吾等に採りて最も不確實なものゝために最も確實なものを犠牲にすることである。尙それよりも一層悪いことは、かゝる超然的不可知的祝福の世界に入る鍵鑰を握れりと僭稱し、此世の生の幸福を賣る者にのみ彼世の祝福に至る特權を與へ得ると僭稱する僧侶輩に吾等の靈的生命を托することである。かく、死其者ではなく、死の原因及び結果の觀念が人間を利用し征服する恐ろしい武器となることを忘れてはならない。死其者が永生を齎らすだらうといふ信仰は生活に就ての疑惑と恐怖とを生み出し、それは常に限りなき幸福の希望を鈍らしたのである。そしてかやうな恐怖の念に屈從してゐることは結局、幸福に憧れてゐる心靈を詐つて、何が眞

に幸福なるやを知らしめなかつたのである。

四 死は生の良友か

科學の發達した現代に於て、最早死をば罪の對償と見たり、眞生命の門戸と見たりすることは出来ないのである。事實、死は生其者の必要なる順序であるといふことを了得するまでは、此暗愴なる疑問の上に光明を齎らすことは出来ない。死は自然の必要である。死は云はん「諸君が生破壊者として非難する吾輩は實に人生の良友である。吾輩がゐなかつたならば、生命は敢て生命たることは出来ないであらう。吾輩は生の深味であり、其美味であり、妙味であり、又その熱情である」と。死は生の友であるといふ——それは何事を意味するのであるか。死が無くなつて欲しいとは人情の至醇なる夢想ではないか。又こ

れがために現代人は、私が最初いつたやうに、ベヤグソンやメチニコフの言辭を息せき歡迎するのではなからうか。吾等は「生存」なる饗應の食卓に向つて飽食しなければ已まぬと願ふではないか。吾等はかの厭はしい鎌を持つた死なる老人を人生の庭園から追ひ出さねば已まぬと願ふのではないか。

嗚呼されど、友よ、もし死の老人を追ひ出し得た時には、却て人生の庭園に於て木も草も花咲かず、稔らず、朽ち果て、了ふのではあるまいか。自然の絶間なき創造と破壊の新陳代謝に於て、死は生命の回春者^{レジュヴエネエター}ではないか。生命は運行である、變轉である。生命を以て生れ来る一切の新しきものは一切の古きものを埋没せねばならない。もし古きものが埋没されなかつたならば、新しきものは決して生れないであらう。死なき生命、又は死が單に偶然の出來事に過ぎないやうな生命は、畢竟生長のない生命である。否な、それは生命ではなく、

死である。一體、常世の者とはどんなものであらう？夜のない晝とはどんなものであらう？此世のものには何事にも限界がある。もし然らざれば却て其活力を失つて了ふ。死は即ち生命に標的を與へ、時間と空間との限界内に吾等の生命を節度し區劃する。かくて、それは生命を確定した、測定しうべき、把捉しうべきものたらしめる。即ち眞に吾等人間の生命たらしめる。而して昨日、今日、翌日の連続や變化がなければ、人生に内容を與へることは出来ない。吾等が生命を持つて生きてゐるといふことを、最初に能く了解するのは、人生が墓場を越えて進み往くことを意識する時である。既に過ぎ去りしこと、それが即ち吾々をして、生きてゐる、現在してゐる、との感じを起させるのである。それが吾々をして宇宙の生命の脈膊を吾等の内に感せしむる處のものである。

吾等の月日は限りあるものであつて、其終局は刻々に流れ去る過去の瞬秒を

一纏めにして其のくぎりを付ける。然しそれがために却て、其一瞬一秒は人間的の一瞬一秒となり、其刻み往く不思議な足跡には、時々刻々、一切の生命の深さと高さを包み込んで往くのである。時の短いことは、時を善用し其機會を利用せよといふ久遠の戒めである。死の嚴肅なることは、即ち生の聖淨化であり、愛の強烈化であり、且つ活動の刺戟である。如何なる悦樂も、それが只一度しか吾等に來ないと感ずる時にのみ却て其喜びに輝があるのである。此一度しか來ないといふことは、あらゆる歡樂の奥底に於ける淋しき秘密であるけれど、而もそれは却て歡樂をして一層大なる歡樂たらしめる神祕である。

刻々流れ去る此時間が何故に爾かく重要なものであるか。それは一度去つては再び來ることなきが故である。さらば個々の仕事は何故に爾かく意味深いものであるか。それは一度決行しては再び繰返すことの出來ない決斷を要するからで

ある。さらば人生は何故に爾かく切實で眞率であるか。それは死に追付れぬ前、急いで生活を続けねばならぬからである。かくて生命に深味と緊急性と嚴肅性を與ふるものは、即ち死の背景であることを悟るのである。かくて「時劫」を焼き盡す「永劫」の火は却て「時劫」の中から燃え立つのである。有爲轉變は即ち永劫がそれ自身を吾等に啓示する様式に外ならない。死は必然生命に屬するものであつて、此事を悟ることが即ち、吾等の思考や意志や感情を驅りて無益に死を忘却したり回避したりしようとするよりも、寧ろ死を征服して勝利を得る方法である。

五 生を以て意味あらしめる死

死は生命に云ひけらく

「萬物は皆我がものよ、」

生命は死に云ひけらく

「さなり、汝は汝がものよ。」

死は吾等の友なることを認めた時に、初めて吾々は勝利者となるのである。然り、夜も吾等の友である。晝に熱い、又朗かな、天日があるばかりでなく、青々たる蒼穹の美に久遠の星辰を輝かせてゐる靜かな神祕的な夜があるのも、嬉しいことではないか。吾等は夜がなくて晝のみの連續に堪え得られないやうに、死がなければ生にも堪へ得られないであらう。生は屢々吾等を倦怠させる。享樂の中にも、又若々しい努力奮闘の中にも、死の憧憬が時に青年の心情に宿つてゐることがある。其大部分は慥に一時の感情であらう。それは恰も晴天の雲影に過ぎないであらう。然し斯る一時的の感情は、白髪が殖えて來ると共に

段々消え失せて了う。それは生の眞剣さに適はしからぬからである。そして其代りに一層深い感情が靈の奥底から湧いて来る。即ち萬事は結局正當となるだらうと青年は期待してゐるが、老人は生命の不満足不充分を感ぜざる能はぬ。生の航海に難船した或る苦い經驗は、何時まで立つても忘れることは出来ず、また揉み消すことも出来ない。吾々が嘗て夢想してゐたやうな赫々たる光明の黄金時代が速に來るだらうと確信して、徒に希望を莫大にしたことは敢て一再にして止まぬ。幻滅、過誤、非理、暗黒の經驗は吾等の生涯に只蓄積されるばかりである。そして吾等は破壊されたる色々な偶像の中に徘徊してゐる。げに生活其者の内に死はその領分を既に擴げてゐるのである。様々な死したる愛、死したる友情、生き残つてゐる過誤、骸骨となつてゐる理想、水臭くなつた關係、萎びた花、苔生す石碑——然り、かやうな死物が色々ある。そして是等

凡ての死物から解放される救ひの道は唯だ一つであつて、それは即ち死其者である。

倦める心、傷める情に探りて死は如何によき休息であり、また元氣付けであることよ！生は屢々吾等が狂的な夢に襲はれつゝ横つてゐる、かの暗い蒸し暑い部室の如く、密閉されまた微臭く感せられることがある。かやうな場合に、死は恰も廣く開けられた窓の如く、其處から飛出して熱き顔を冷まし、宏大な靜謐な純潔な神聖な夜の大空に平和な星を眺めさすが如く感じられる。人生に只永き限りなき晝のみでなく、夜があると云ふことは、却て仕合せではないか。晝は百千の雜事を以て來り、吾等を壓伏し、吾等の幸福と平和を奪ひ去る。されど憂ふる勿れ、夜は來りて、神聖なる夜は來りて、吾等を慰める。世人が彼れ是れと吾々のことを云つた處で、何かあらん。翌日は死なねばならぬと決つ

てゐるのに、何を苦しんで此僅かな、傷だらけの喜びを追ひ求める必要があらう？ 寧ろ吾等をして此生命の喧騒から遁れ出て、静かな清い夜に飛込み、高く翔り、星辰に咫尺し、久遠の大氣によつて心を鎮め、胸の平和を喜ばしめよ。生の健闘と嵐の中に、願くば吾々をして時折死に就いて考へしめよ。そして此思索は吾等の全生命に採りて驚くべき妙劑たるを得るであらう。

六 人生の解釋者たる死

されど、死は單に生命の友であり恩人であるばかりでなく、それは人生の解釋者である。生命は一體如何なるもので且つ如何なるものたるべきやを、一層善く語るものは科學や哲學よりも寧ろ死である。諸君は嘗て嚴かな死の門口に立つて見たことありや。其時、諸君は自分の生命の最も深い經驗を得なかつたであらうか。其時、生の眞理は以前よりも一層明瞭に了解されなかつたであらうか。それは恰も最後の審判の日に於けるが如く、諸君の生活に於ける眞なるものと偽なるものが、其時判然たることを得なかつたであらうか。其時、人生の意義を悟り、又愚人がなす事物の評價の誤りと、事物の眞價を逸して虚偽を趨うて走る愚人の愚とを看破し得なかつたであらうか。其時、諸君は吾等人間の生存が普通如何に頓馬で、のらくらであるか、又それが如何に遠く眞實から懸け離れてゐるかを感じなかつたのであらうか。かくて諸君は其時、明かに認めたる死の色々な啓示を、決して忘れはすまいと決心しなうか。もし吾等が自身で上述の如く死の面前に立たなかつたとしても、愛する者の臨終に侍りしことがないとも限るまい。それは實際非常に教訓的な瞬間である。其時神は、御言葉の前に吾等の靈が自ら頭を下げて摺伏するほどの威力を以て、吾等に語

り給ふたであらう。其時生の眞理は啓示され、此世は吾等の眼界から消え失せて了つたであらう。生の大悲痛も、生の悲惨なる奮闘も、おゝ如何に意義なきものと消え果てしことよ！

然り、もし死がなかつたならば、人生の事柄を其價值に従つて批判することが果して出来るであらうか。死は虚偽や虚榮の雜草を焼き盡して、後に純化された生命の黄金を残す熱火である。傳來云ひ古した所謂『人生の斷末魔に於て』、何が吾等に重要なものであるか。それは吾等が憧れた榮譽であるか。それは吾等自身の努力によつて得た勝利であるか。それは吾等が復讐欲の満足であるか。それは歡樂の思出であり、意氣の勝利であり、正義の強行であるであらうか。愛する者の死に臨んで今や是等のものが、如何に些々たるつまらぬものに見えることよ！ 吾等は是等一切のものを擲つて、今まで餘り價值のないもの

と見た所のものを、其代りに攫みたいと思ふであらう。然り、死の嚴かな瞬間に於て、愛や忠實の義務の卒直なる履行が、如何に尊きものと見えることよ！ 噫如何に吾等は人生の眞理をまともに見させないほど、吾等を盲目に頑固になす處の利己心を呪ふことよ！ 人生一切の純眞な法則の中、愛こそ無上の權威であり、又萬物の統御者である。而して死は生命の最大事實であつて、此福音の眞理を證かす最も強い證據である。愛や忠節や、眞理や善美の如き、事物の一層高い法則を知らしめ、且つ夫等に就いて確信を懐かしめる處のものは則ち死である。死に臨んでは誰も是等の法則が眞の法則であることを疑ふものはない。されば死は一種偉大なものであつて、死は人間を偉大なものとなす。處で吾等は今如何にして死の準備をなし、又如何にして、恐れすひるまず、死の前に立つことが出来るかを知る。吾等が死出の山路を辿らねばならぬ時、

後に残れる人々のために吾等は吾々自身の何物を残して往くべきであらうか。吾等が他の人々に與へた處のもの、又彼等に遺し置くであらう處のものは、實に吾等の生活をして生き甲斐あらしめる處のものであらうか。自分が此世に在りしが故に他の人々の生活は一層強く、一層眞實に一層自由なるものとなつたであらうか。吾等に對して吾等がゐなければならぬほど必要を感じてゐる處の人達が、此世に一人にてもなかつたであらうか。もし其處に吾々自身の中に神の啓示を感じ、又吾々を透うして神の生命の直覺を得、神の愛を感じ得た處の他の人々が一人にてもなかつたであらうか。もし一人にても之れ有りしとせば、吾々は此世に於ける幸福を知り、且つ人間生活の職分を果したものであつて、死とても此事實を揆き消すことは出来ない。

七 死後の生活や如何

では次に死後の生活は如何なるべきか？ 心と腦との間に連鎖のあることは知つてゐるが、然し此連鎖は必然の連鎖であることを慥めることは出来ないのであるから、科學は尙信仰の餘地を認めてゐるのである。即ち科學は頭腦の死滅が必然心意の滅亡を意味するものとはいひ得ないのである。だから永生に對する希望の餘地は充分にあるのである。もし科學に其否決權がないとすれば、愛は積極的に萬物を信じ、萬物に望を屬し、又愛は其求める處を欺かない。よし科學が信仰や希望や愛を荒唐無稽なものなるかの如く見えしめるとするも、私は是等のものが其荒唐無稽と矛盾撞着とを打破つて、夫等自身の要求を強ひることがないとは云へない。否な、屹度我等自身の要求を強ひるであらうと思

ふ。兎に角に、私は死後の生活に關する事柄に就いて一言も云はずに此際此話を終ることは出来ない。

吾等が死灰となる瞬間に於て、吾等は死灰以上の或物が吾等の内にあることを強く感せずには居れない。然り死灰以上のもの！友よ、死の中から輝き出づる人生の偉大さはげに死以上のものを指してゐる。私は死に就いて多くのことを知るといつた——死は生に奉仕し、生を輝かし、生を増大すといつた。されば神の世界に於て最後の斷案を下すものは死でない、生である。死は最後のものではない。それは只だ生命發展の一様式であつて、生命の滅却ではない。而して此假定の上に萬事は其根據を置いてゐるのである。

死は人生の友であり恩人であると私は云つた。然し私は忘れてはならない。私は自身を欺いてはならない。私はこの血腥い世界の戰場に就いて考へざるを得ない。

私は花咲く春に逢ふこともなくして凋落する多くの小兒あるを思ふ。又自分の愛する者に取りて、或は世界に採りて、如何に無くてはならぬものなるや否やに頓着なく、精力の旺盛な若者が俄然死の虜となることあるを思ふ。又死に就いて一切の不可解な、残酷な、暗愴たる事柄を思ふ。結局、死は不自然であつて、神の世界に適はしからぬものであるといふ感じが誰れの心にもあることを思ふ。而して此感じは樂園の説話に反映されてゐる。畫家達は屢々かの人間の始祖が彼等の子の死に臨んで、死が何んであるかを知らなかつた其云ひ知らぬ驚きの表情を描き出さんと試みた。蠻人は今尙實際に此種の驚愕を保存してゐる。死の恐怖は雷霆の轟くが如き口調を以て其處に何等か謎語的な、不自然な、恐ろしいものがあることを吾等に語る。かくて吾等は再び夜の世界に追ふ。而してそれは輝いた星月夜ではなく、吾等を窒息させるやうな、冷酷な、

奇怪な暗黒である。おう死よ、汝は如何に残酷なるものよ！

八 永生の信仰

されど死の暗黒裡に於ても尙ほ死を最後のものと信じ得なかつた多くの人々があつた。私は茲に生に於けると同様、死に就いても「信する」といふ。それは信仰の問題であつて科學の問題ではないからである。是等多くの人々は生を求めた。そして古來賢者等は墓場の彼方から此世の吾等に輝き渡る光明に就いて語つてゐる。ギリシヤの哲學者達は、靈の高處に昇つて、神々しくも不思議な不滅の生命に關する彼等の信仰を説いてゐる。そして彼等は一切の美を盡した深味ある將來の生活を描き出さんと努力した。以來、死は最後のものでないと言ふ暗示が、古代文化の世界から見失はれたことはなかつたのである。そして

間もなく東方より勝利の聲は鳴り響いた。吾等の救主イエス クリストは死を滅し、福音の力によつて久遠の生命を世に齎らした。イエスは自然的生命以上の生命を體現せるものであつて、彼こそ世界に超越せる生命を證すものである。イエスの福音に於て、彼れの稱へし神の王國に於て、吾等が夢幻の塵世よりは異つた、より高い世界の默示があるではないか。此超然的世界に死の領分はない。それは天父の世界であり、永久なるものゝ世界である。また死せる者の神ではない、生ける者の神の世界である。死は其處に勝利の中に併吞されて了つてゐる。而もそれは科學的證明の及ぶ限りではなく、それは畢竟信仰の問題である。而して吾等は證明によりて生きず、信仰によりて生き得るのである。生ける神——これのみぞ、死の謎語を解く鍵鑰である。生ける父なる神こそ生命の力として彼自身を啓示し給ふた。かくて死に打勝つ勝利の極致に達するは難事では

し。神か死か——其孰れか一つを擇ぶこと、それは廣い世界に存在する一切の反對對當の内、最も大なる對比である。もし吾等に神の信仰がなかつたならば、吾等は如何にして死の支配を免かれることが出来るかを知らないであらう。父なる神に繋がれる吾等の關係は、死線を越えて高く吾等を揚々たらしめる不滅の羈絆である。死は人間のために存在するのであつて、人間が死のために生きてゐるのではない。

祈 禱

おう神よ。あなたは永遠より永遠に、神で在まし給ふ。あなたの時劫は過つことなく、あなたの久遠は吾等の時間の根柢であり、吾等の生命に堅實なる意義を與へるものであります。もし然らざれば吾等の生涯は先きの見え透いた話を聞くが如く、無益の業であります。吾等は生命の此短き日に就いて考へます。

そして之を考へると同時に、吾等の心情が智慧に輝き渡らんことを禱ります。願くは此短き日盛りに吾等の活動を續け、久遠の善美に奉仕することを扶助し給へ。吾等は死に就いて考へ、そして吾等が主の死は彼をして死の主たらしめたことを嬉れしく感じます。願くは暗黒の谷に於て我等と共に在まし、吾等をして邪惡を恐れしめ給ふ勿れ。そして此世の生の黄昏に光あらしめ、久遠の天日を見るべく日没の橋を渡らせ給へ。

されどおう神よ、一人／＼吾等の友は過ぎ去る。誰か友を失はぬものがありませう。私共は其消え失せたる手を握らんとて苦しみ、又其静まりし聲を聞かんとて嘆くものであります。願くはあなたの御姿と愛とを以て我等を慰め、また強め給へ。私共が長く愛し暫く相別れてゐる人々の容貌を思ひ浮べて追慕措く能はざるが如く、神よ、あなたも其暖かき大御心に彼等を愛し給ふことを信じ

ます。あなたの活きた愛は吾等が愛せし者共を滅亡の域に放任し給はないことを吾等は信じます。そしてもし御心に叶ひますならば、あなたの御前で、再び彼等に逢ひ得る時あるべきを信じます。其時吾等はあなたの御姿にあやかり、又久遠の生命をもて靈と靈との交通に満足を見出すであらうことを、神よ、尊き御名によりて希ひ奉ります。アーメン

死生と宗教終

大正十三年八月一日印 刷
大正十三年八月四日發 行

死生と宗教
定價貳圓四拾錢

著 者 帆 足 理 一 郎

發 行 者 河 本 哲 夫

印 刷 者 宮 下 桃 太 郎

東京神田區北神保町二番地
東京小石川區指ヶ谷町四番地

發 行 所

東京市神田區北神保町二番地

新 生 堂

振替 東京六六二七三
口座 長野三四四六

帆足理一郎著作目録

博文館

同

同

同

新 生 堂

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

文化 生活と人間改造

訂 聖 愛の世界へ

人間 苦と人生の價値

婦 人 問題 評論 集

精 神 生活の 基調

改 訂 哲 學 概 論

訂 宗 教 と 人 生

社 會 と 人 生

哲 學 と 人 生

教 育 と 人 生

改 訂 縮 版 教育 哲學 概論 (全譯)

人 生 詩 人 フロウ ニン グ

死 生 と 宗 教

宗 教 哲 學 概 論

二、四〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

三、〇〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

二、四〇

既 刊

同

同

同

同

既 刊

同

同

同

同

同

同

既 刊

同

504
292

終